

転職して天職にたどりついた私

「教育」「勤労」「納税」。これが国民の三大義務だ。よって、特に進路を目の前にする3年生の担任をすると、教え子が将来どんな職業に就くだろうかということも思い巡らしながら進路指導にあたっていたものだ。

担任をしていた頃は、「この子はいかにも“捻りはちまき”が似合いそうだ」などと思うと、その生徒をつかまえてはこう言った。

「おまえは将来、寿司職人になれ。雰囲気ピッタリだ。雇われ職人ではだめだ。修行を積んで、自分の店を構えるまで必死に頑張るんだ。そこに、かつての恩師である俺が店を訪れ、腹一杯寿司を食べる。『いやあ、うまかった。お前も一人前に成長したな。うれしい限りだ。』『ありがとうございます。』『それじゃあ、お勘定。』『先生から頂くわけにはいきません。今私があるのも先生のおかげです。』とまあ、こんな調子だ。どうだ、寿司職人になる気はないか。」
「……………？考えておきます。」

教え子の中には、自分で飲食店を経営している人間もいれば、飲食店で働いている人間もいるが、まだ寿司職人をやっている教え子は、私が把握している限り一人もいない。私が、声をかけた教え子に限って、寿司を握らず、寿司の代わりにハンドルを握って、運送会社等のドライバーになっている人間が多い。（これは以前にも披露した話だったかな？）

まあ冗談はさておき、これまでの教え子の全てがどんな職業についているかはもちろん把握してはいないが、感覚的に、特に女子生徒は看護や福祉関係の仕事に就いている割合が多いとの印象をもっている。当校の家庭連絡票を見ても、医療関係や福祉関係に勤務の保護者が多いことに気づく。

コロナ禍のこのご時世だからこそなおさら、シフト勤務等でご自身の体調管理もたいへんな中で、医療・福祉の激務をこなす方々、その第一線で奮闘している皆さんには、心から敬意を表したい。頭が下がるばかりだ。

職業に貴賤はなく、もちろん楽な職業などはないだろうから、いかなる職種であろうと、勤労とは厳しくもあり尊くもあるものだと思う。

私が初めて3年生を担当したときのクラスにこんな女子生徒がいた。その子は、学力だけで考えれば、2ランクも3ランクも高いレベルの高校に進学できたのだが、家から一番近い公立高校に進みたいと申し出ていた。父親を早くに亡くし、看護師の母親と親一人子一人の家庭で育ったこともあり、家事をして母親の助けになるのを優先したいこと、そしてギリギリで進学した学校の下の方でくすぶりよりは、希望する学校ならかなり上位の方でいられそうなので、かえって進学や就職にも有利に働くのでは、という考えだった。

そして、将来は母親と同じ看護師志望という思いで、一貫してその進路選択に迷いはなかった。進路の最終判断の三者面談で、互いに納得し見つめ合う微笑ましい母子の姿は、今なお脳裏に焼き付いている。

さて、進路指導をしていると、よく生徒や保護者が口にするのは、「いい高校に入りたい」ということである。一体「いい」高校とは何なのだろうか。

一般的な推測では、「学力が高い」＝「いい」とか、「評判がいい」とかの意味で使用している人も少なからずいるのでは、と勝手ながら想像してしまう。

しかし、東京大学を卒業した私のある知人は、成人してしばらく職を転々とした後、いつのまにか引きこもり状態になってしまった。逆に、中学生の頃、まるきり勉強が苦手で「俺が入れる高校なんてないよ」と泣きながら相談にのってくれと懇願した幼なじみは、今や、ガソリンスタンドを何件も経営し、私の何倍もの年収を稼いでいる地元の名士だ。何が幸せの尺度か人それぞれではあるだろうが、「いい高校」というよりは、「いい人生」に向けた進路の実現であってほしいということは言うまでもない。

中学校では、教育計画の中に、「キャリア教育」を明確に位置づけている。特に総合的な学習の時間を柱に、様々な外部講師や諸団体を招いて職業講話や体験活動をしたり、職場体験活動をしたりするのもその一貫である。職場体験など昔はなかったカリキュラムだが、今やどの中学校でも定番だ。

しかし、職業選択の参考として、生徒にとって一番身近な存在なのは、自分自身の家族ではなかろうか。実際、先に述べた女の子も、母親の姿を見て自分が思い描いた進路を実現し看護師となった。

昔から「おやじの背中」を見て子は育つ、などと言われてきたが、子どもは自分の親がどんな職業で、その仕事にどんなやりがいを持ち、どんな苦悩があるのか理解しているのだろうか。ぜひそれを親から子に語ってもらう、あるいはできれば親の仕事を実際に子どもに見せることこそ、家庭でできる最大のキャリア教育であると思う。親は、職業人としての大先輩なのだ。

私の実家は自営業で、汗水流して働く両親を常に間近で見て育った。両親の喜怒哀楽を毎日肌で感じることは、自分の人間形成に大きく影響した。

後に高校教師になった長兄は、学者タイプで人付き合いが下手な人間なので、いずれ家業を継ぐのは、次兄か三男坊の自分のどちらかだと思っていた。

しかし、結局、次兄が大学卒業と同時に家業を継いだ。家族・親戚で何らかの話し合いがもたれた形跡もなく、父や母の指名でもなかった。何となく当たり前のようにそうなった。でも、三兄弟それぞれの適性、性格、個性などを熟知しているものにとっては、誰もが納得する結論だったと言われている。

銀行員を5年経験し教師になった自分だが、今では、家業は兄貴が継いで正解だと思っている。なぜなら、教師は自分の天職だと思えるからだ。すばらしい教え子や保護者や先生方との出会いは、私の何にも代え難い生涯の宝だ。

大学で教職課程をとった娘に、「学校の先生ってどう？」と聞かれたことがある。「自分の人生は自分で決めろ。」と言った。「やりがいはある。でもこれから学校の先生をめざす人間は、それ相当の覚悟が必要だ。」と付け加えた。